

学習支援を通じた気づきと学び



地域創生科学研究科博士前期課程 2年

アギーレ ナルミ

国際学部国際学科 2年

清本 まゆみ

私達は、現在、県内のある小学校の日本語教室で、スペイン語を母語とする児童に対して学習支援を行っています。学年は、2年生と6年生の2名を主に支援しています。2名ともまだ日本語による会話が少し難しいので、スペイン語と日本語を使って勉強の内容を説明しています。

2年生の児童は、一昨年から継続して支援している児童です。1年生の頃は、日本語で会話をすることが難しく、休み時間の会話や学習内容の説明は、全てスペイン語でしなければなりませんでしたが、2年生になった現在では、日本語で話しかけてくれるようにまでなりました。しかし、日本語の習得は、日常的な会話場面に限られてしまっていることに、学習支援を通して気が付きました。今までの学習内容は、スペイン語で説明できる範囲内の内容でしたが、学年が上がるとともにその内容が難しくなってきたこと、さらに、その児童が教科学習に使われるようなスペイン語に触れた経験がないため、単にスペイン語に通訳するというわけにもいかないことから、支援の難しさを実感しています。日本語もスペイン語も発達途中にある故の困難を初めて肌で感じました。

小学校6年生の児童には、主に算数を教えています。彼はまだ日本語がよく理解できないため文章問題はまだ解けませんでしたが、算数が

好きなため、掛け算や割り算の問題を黙々と解いていました。担任の先生から彼に日本式の筆算を教えて欲しいと頼まれたので日本式の解き方を教えました。最初は数字しか使わない計算を教えることは簡単だと思っていましたが、今まで解いてきた方法を何故変えなければならないのかを小学生に説明するのは難しかったです。彼に納得してもらうために、日本では理解度を確認するために計算式も書かなければならないこと、南米式で解いてしまうと先生が理解できず答えが合っていない不正解とされてしまうことを説明しました。彼は最初、不満げな表情で南米式のまま解き続けましたが、何問か一緒に解くうちに日本式で解いてくれるようになりました。この経験を通して、勉強をする理由を子どもに説明し納得させる難しさと重要性を学ぶことが出来ました。

このように、現在実施している学習支援は、児童との向き合い方や教え方などに少し困難を感じる部分もありますが、毎回の支援で彼らから学ぶことが多くあります。今の私達にできることは、彼らが学校で取り残されてしまうことがないように、継続性のある支援を実施すること、そして彼らに寄り添うことだと考えています。過去には当事者でもあった私達だからこそ、彼らに寄り添う心を持つことが大切だと思います。